



伊澤利光

# すべては 勝利のために

日本プロゴルフ選手権で1年8ヵ月ぶりのツアー優勝。  
並のプロなら驚くこともないが、かつて2度も賞金王の座に就いた  
伊澤利光にとって、1年8ヵ月はあまりに長すぎた。  
この間、いったい伊澤に何があったのか、そして何が彼を復活させたのだろうか。  
優勝を飾った翌週の2007年5月21日、伊澤利光が胸に秘めていた思いを語った。

文 | 近藤廣  
text Hiroshi Kondo  
写真 | 福岡圭一  
photographer Keiichi Fukuma

### 「ただ素直にうれしかった」

80年近くにおよぶ長い歴史において、今年の日本プロゴルフ選手権は初めて沖縄県(喜瀬CC)が舞台となった。この地で伊澤は05年8月アンダーアマークBCオーガスタ以来、1年8カ月ぶりの優勝を飾り、日本オープン、日本ツアー選手権と合わせて史上初の国内メジャー3冠を達成した。だが、優勝のバツトを決めた瞬間の伊澤利光には派手なガッツポーズもなければ涙もなかった。「最後がちよっとカッコわるかったからね」

たしかに、バーディでも奪ってさらにリードを広げての優勝だったら、派手なパフォーマンスも出たのかもしれない。しかし、「素直にうれしかった」という。

「オフにいろいろやって、その成果が出た。やったことが間違っていなかったな、と」

ある意味でそれは当然の結果。だからこそ伊澤は静かに喜んだのだろう。

かつて、伊澤利光のスイングは「世界一美しいスイング」といわれ、若手たちの目標だった。2度の賞金王に輝き、2001年にはマスターズで日本人として最高位の4位。さらに02年には丸山茂樹と組んで出場したWGCワールドカップで優勝し、世界の頂点まで登りつめた。

ところがその後、04年には優勝がなく、05年は1勝のみ、そして06年は賞金ランキング78位まで落ちてしまっ



た。「低迷」という声が聞かれ、「伊澤も、もう限界かな」という声も出はじめた。今年も、開幕戦こそ11位タイだったが、第2戦目では予選落ち。そして第3戦目では指を傷めてしまった。

「自分の中では予選落ちなんていうイメージはなかったし、おまけに指を傷めたこともあって、何のためのオフを過ごしたのかなあ、という気持ちになったのは事実。去年の春から秋口にかけて調子がよくなかったときの状態を引きずっているような状況に、気持ちが悪く落ち込んだこともあった」

ただ、彼の中では昨シーズンとはまったく違うことがあった。それはショットだった。

ダーアママーのゴルフウェアで知られる株式会社ドームの、トップアスリートに対するサポート体制だった。ドームは、アンダーアママーの他にDNSというサブブランドを製造販売しており、大手サプリメントメーカーという顔も持つ。その強みを活かして、現在メジャーで活躍する松坂大輔投手、ツアー初優勝を遂げた増田伸洋プロ、矢野東プロなど、多くのアスリートの肉体改造をサポートしている。伊澤は昨年未だドームとアンダーアママーで契約したが、加えてトレーニングシステムまで含めたトータルサポート体制に信頼を寄せている。

「これまで、トレーニング方法とかあるいはプロテインなどの健康補助食品をどう摂取したらいいかなど、専門的なことは知らなかったし、知ろうともしなかった。それを専門的にしっかりとサポートしてくれるのは助かりますね。現在のところは故障もないし」

オフのトレーニングの目に見える成果のひとつが、アイアンの飛距離アップだ。特に飛ぶスペースに換えたわけではないが、それでも飛距離は昨年より確実に伸びているという。

「僕の気持ちの中では、オフのトレーニングはパワーアップ、言い換えるとヘッドスピードを今以上に上げるのが目的。年



通算5アンダーで優勝を飾った日本プロ選手権。優勝後、伊澤は「泣くかと思ったが、意外とさっぱりしていた」と笑顔で話した

「ショット自体は開幕戦からずっとわるくなかったもので、それほど不安はなかった。完全復活とはいわないまでも80パーセントくらいまでは復活できたかなと思っています」

フェードボールの精度を高める段階にまでショットを戻すこと。これが、彼のいう「昨年後半からオフにかけていろいろやってきたこと」のひとつだった。また昨年後半にクラブを換えたことも大きいという。彼はもともとヘッドスピードが速く、ドライバーで約55m/s。日本のツアーでもトップクラスだ。これが飛びの最大の要因でもあるけれど、ハードヒッターになると逆に、スピニングが多くなりすぎるとい

年齢的には厳しいことで、現状維持に甘んじていると下がってしまう。気持ち的には少しでもアップさせたいくらいのもつもりでいないと現状維持できない」

つねに上を目指すトップアスリートの向上心と、ドームのサポート体制とがうまくマッチし、大きな成果につながったということだろう。更に伊澤は今季から「アンダーアママー」のウェアで戦っている。独自のテクノロジーで驚異の乾燥力やスイング動作を阻害しない素材、着ていることを忘れさせる軽さを実現したゴルフウェアだ。

「シャツもパンツも、動きやすさという点でいえばまったく不安がないですね。ゴルフウェアといっても、なかには背中が引つ張られたりしてスムーズなスイングができないウェアもあったりするけれど、そんなことも全然ない」

### もう一度あの舞台で戦ってみたい

これから汗をかく季節を迎え、ゴルフファーにとってはベタついて不快なったり、動きが阻害されたりして嫌なものだが、「アンダーアママー」の機能性は、そんな心配を吹き飛ばしてくれるという。

「楽しみです。触った感じもいいので、いまから期待しています」

01年のマスターズで記録した日本人として最高位の4位タイ。その体験は今なお鮮明であり続けている。「あの場所で自分なりにわかったこと

「昨年後半からオフにかけていろいろやってきたこと、それが間違っていなかった」



がある。だからこそ、もう一度あの舞台で戦ってみたい」

そのチャンスをつかむには、日本のツアーで賞金王になるのがまずは近道だ。体調も戻り、持ち前のフェードボールも精度が増してきた。アスリートにとっては重要なギアのひとつであるウェアにも信頼がもてる。「オフにいろいろやった」ことの結果が、一挙に実った復活優勝。それは伊澤利光にとって、海外メジャーに向けての序章にすぎない。

いざわ・としみつ  
1968年3月2日生まれ、神奈川県出身。21歳のプロ転向後、直ちにアメリカへ渡り、「ナイキ・ツアー」に参戦。93年に日本へ帰国、95年に日本オープン選手権でツアー初優勝を飾り、01年にはマスターズ・トーナメントで日本人史上最高の4位入賞を果たす。01年、03年の賞金王。通算23勝。



# Toshimitsu Iizawa